

まくらのそうし  
枕草子(二)

せいしょうなごん  
清少納言

「七十五」 ありがたきもの 舅しゅうとにほめらるる婿むこ。また、姑しゅうとめに思はるる嫁よめの君。  
毛けぬきのよく抜くるしろがねの毛けぬき拔しゆう。主しゆうそしらぬ従者ずさ。

つゆの癖くせなき。かたち・心・ありさますぐれ、世よに経る程ほど、いささかのきずなき。おなじ所に住む人の、かたみに恥はぢかはし、いささかのひまなく用意よういしたりと思ふが、つひに見えぬこそ難かたけれ。

物語・集しふなど書き寫うつすに、本ほんに墨すみつけぬ。よき草子さうしなどは、いみじう心して書けど、かならずこそきたなげになるめれ。  
をとこ、女ををばいはいはじ。女めども、契ちぎりふかくて語かたらふ人の、末すゑまでなかよき人かたし。

「九十六」 かたはらいたきもの よくも音ね弾ひきとどめぬ琴ことを、よくも調ていべで、心のかぎり弾ひきたてたる。客まろうと人ひとなどにあひてもいふに、奥かたの方にうちとけごとなどいふを、えは制せいせで聞きく心地こころち。思おもふ人のいたく醉ゑひて、おなじことしたる。聞きあたりけるを知らで、人ひとの上うへいひたる。それは、なにばかりの人ならねど、つかふ人などだにかたはらいたし。旅たびだちたる所ところにて、下衆げすどもざれぬたる。にくげなるちごを、おのが心地こころちのかなしきままに、うつくしみ、かなしがり、これが聲こゑ

のままに、いひたることなど語りたる。才ある人の前にて、才なき人の、ものおぼえ聲に人の名などいひたる。よしとも覚えぬ我が歌を、人に語りて、人のほめなどしたる由いふも、かたはらいたし。

「九十七」 あさましきもの 刺櫛すりて磨く程に、ものにつきさへて折りたる心地。車のうちかへりたる。さるおほのかなるものは、所せくやあらんと思ひしに、ただ夢の心地して、あさましうあへなし。

人のためにはづかしうあしきことを、つつみもなくいひみたる。かならず來な  
んと思ふ人を、夜一夜起きあかし待ちて、暁がたにうち忘れて寝入りにけるに、  
鳥のいとちかく「かか」と鳴くに、うち見あげたれば、晝になりける、いみじ  
うあさまし。

見すまじき人に、外へ持ていく文見せたる。むげに知らず、見ぬことを、人の  
さしむかひて、あらがはすべくもあらずいひたる。物うちこぼしたる心地、いと  
あさまし。

「二六八」 男こそ、なほいとありがたくあやしき心地したるものはあれ。いと  
よげなる人を捨てて、にくげなる人を持たるもあやしかし。おほやけ所に入りた  
ちする男、家の子などは、あるがなかによからんをこそは、選りて思ひ給はめ。

およぶまじからぬ際をだに、めでたしと思はんを、死ぬばかりも思ひかかれかし。  
人のむすめ、まだ見ぬ人などを、よしと聞くをこそは、いかでとも思ふなれ。  
かつ女の目にもわるしと思ふを思ふは、いかなる事にかあらん。

かたちいとよく、心もおかしき人の、手もよう書き、歌もあはれに詠みて、うらみおこせなどするを、返りごとはさかしらにうちするものから、よりつかず、らうたげにうちなげきてゐたるを、見捨てていきなどするは、あさましう、おほやけ腹立ちて、見證の心地も心憂く見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐるしさを思ひ知らぬよ。

「二六九」よろづのことよりも情あるこそ、男はさらなり。女もめでたくおぼゆれ。なげのことばなれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしきことをば、「いとほし」とも、あはれなるをば「げにいかに思ふらん」などいひけるを、傳へて聞きたるは、さし向ひていふよりもうれし。いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがな、とつねにこそおぼゆれ。

かならず思ふべき人、とふべき人は、さるべきことなれば、とり分かれしもせず。さもあるまじき人の、さしいらへをもうしろやすくしたるは、うれしきわざなり。いとやすきことなれど、さらにえあらぬことぞかし。

おほかた心よき人の、まことにかどなからぬは、男も女もありがたきことなめり。また、さる人も多かるべし。

「三一九」この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう、人のためにびんなきいひすぐしもしつべき所々もあれば、よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

宮の御前に、内の大臣のたてまつり給へりけるを、「これになにを書かまし。

上の御前には史記といふ書をなん書かせ給へる」などのたまはせしを、「枕にこ

そは侍らめ」と申ししかば、「さば、得てよ」とて賜はせたりしを、あやしきを、こよやなにやと、つきせずつくさんとせしに、いとものおぼえぬ事ぞ多かるや。

おほかたこれは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも、木・草・鳥・蟲をも、いひ出したらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしらめれ、ただ心ひとつに、おのづから思ふ事を、たはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかと思ひしに、「はづかしき」なんどもぞ、見る人はし給ふなれば、いとあやしうあるや。げに、そもことわり、人のにくむをよしといひ、ほむるをもあしといふ人は、心のほどこそおしはからるれ。ただ、人に見えけんぞねたき。

左中將、まだ伊勢の守と聞えし時、里におはしたりしに、端のかたなりし豊

さし出でしものは、この草子載りて出でにけり。まどひとり入れしかど、やがて持ておはして、いとひさしくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり。とぞほんに。